

小枝 九郎(こえだ・くろう)

1、プロフィール

方言詩人。戦前、文芸誌「月刊東奥」、方言詩誌「芝生(カガワラ)」に、津軽方言詩を発表。戦後は、詩誌「壺年」、「北」、「雪」などに抒情詩を発表した。

<生没>

1915(大正4)年2月24日～1999(平成11)年5月9日

<代表作>

「津軽弁の詩の本コ 芝生」第一号

<青森県との関わり>

中津軽郡堀越村(現 弘前市取上)出身。戦前、弘前で方言詩集「芝生」を発刊。戦後、青森で古書店緑書房を開店した。

2、作家解説

大正5年中津軽郡堀越村に、父栄助、母くにの四男として出生。中津軽郡立玉成高等学校では級長を務めたが、家庭の経済的理由により退学。店員見習いをしていたが、肺浸潤を患い自宅療養となる。昭和7年頃秋村静映と知り合い、詩作を始め、抒情的方言詩を発表していた植木曜介に詩作の指導を受ける。詩誌「蒼穹」を創刊、詩誌「府」に作品を発表し、東奥文壇などで活躍する。9年「津軽方言詩集」(私家版)を発行していた一戸謙三を植木とともに訪ね、津軽方言詩誌「芝生(カガワラ)」の発刊を計画する。「津軽弁の詩の本コ 芝生(カガワラ)」は、翌10年から11年にかけて四冊発刊された。「どゝこの／守子(アダ)コで／蛙(ゲロ)のこゝア／おがて行(エ)ぐ」(「早春(ハルサギ)の田圃(タモチ)」)、「芝生(カガワラ)ニ」。その後、横須賀海軍工廠に勤務し、14年東奥日報社から発刊された文芸誌「月刊東奥」の普及に努める。16年に肺浸潤が再発し帰郷、堀越村役場書記となる。日幌草太、木村助男、葉也子らが加わった再刊「おら達(だづ)の詩の本コ 芝生(カガワラ)」は、17年に六冊発刊された。

戦後、電気製塩業を経て魚肥対策本部書記となったが、22年に青森市浦町に古書店緑書房を開店する。詩誌「壺年」、「北」、「雪」などに抒情詩を発表し、青森県詩祭の開催にも尽力した。30年になって、妻と離縁。緑書房を閉店する。その後、事務局長として原水協青森県協議会の活動にも取り組む。36年八戸市の缶詰工場に勤務したが、肺浸潤が再発。38年以降盛岡市のパチンコ店に勤務しながら、凡そ35年間単身で居住。知人の間では小枝の所在、動向が不明となった。長き時を経て、知人へ津軽方言詩を付した年賀状を郵送するようになったのは、平成4年頃のことである。7年には弘前市立郷土文学館企画展「津軽方言詩の人々」で紹介され、9年には吉村和夫によって、「郷土作家の素顔 方言詩の人々 小枝九郎」が、陸奥新報に連載された。小枝自身も、9年に「今昔『津軽方言詩』」を陸奥新報に連載した。津軽方言詩の系譜、高木恭造などの方言詩人の作品、人物像など貴重な証言が綴られている。11年5月9日、逝去した。

3、資料紹介

○「津軽弁の詩の本コ 芝生」第一号

雑誌

1935(昭和10)年2月15日

150mm×115mm

植木曜介、小枝九郎が中心となり発刊。一戸謙三の「口上」を初め、同「相床(ダガサネコ)」、植木「謎(ナンジョ)」、小枝「ベゴコ」、行本千介「隣(トナ)の媼(ババ)むし」、長谷川邦夫「雪囲(かこひ)」など、十篇の方言詩が掲載されている。小枝は編集発行人であった。